

三浦所太郎と東北農業協会・東北ミッション

Miura Shotaro :
The Tohoku Agricultural Association and The Tohoku Mission

松野尾 裕
Hiroshi MATSUNOO

要 旨

三浦所太郎（1913-1987）は、昭和戦前期に宮城県利府村及び岩手県摺沢村における農民福音学校に参加して、「三愛（愛土、愛隣、愛神）」の思想と運動に深く共鳴し、戦後も一貫して、三愛思想にもとづく農民生活改善と農村建設に生きた人である。本稿の課題は、三浦が1979年に公職を退いてから87年に74歳で死去するまでの間における、彼がもっとも自由に自らの思いにしたがって取り組んだ2つの活動、すなわち「東北農業協会」及び「東北ミッション」の活動について考察することである。それらの活動に三愛思想の現代的復活を願う三浦所太郎の熱意を見出すことが出来る。

目 次

- 1 農民福音学校と三浦所太郎の決意
 - (1) 農民福音学校
 - (2) 勉学の道
 - (3) 山岳傾斜草地農業の実験
- 2 東北農業協会
 - (1) 東北農業協会の設立
 - (2) 「予言」・「預言」としての農業
 - (3) 農家・農業・農村論
- 3 東北ミッション
 - (1) 農民宣教学校
 - (2) 学び合い
 - (3) 最後の言葉
- 4 おわりに

1 農民福音学校と三浦所太郎の決意

(1) 農民福音学校

三浦所太郎は、1913（大正2）年1月10日に、岩手県東磐井郡摺沢村（現・一関市大東町 摺沢）に農家の長男として生まれた。1915年に妹の三浦しめ（1915-1944）が生まれた。所太郎が5歳、しめが3歳の時に母親が亡くなった。その翌年に継母が来て、所太郎としめ

を育てた。

所太郎は摺沢尋常高等小学校及び摺沢農業補習学校を卒業した。この頃、所太郎は自身の人格形成に大きな影響を与えることになる2人の人に出会った。1人は農業補習学校教員で摺沢村農会技手もつとめていた松川正、もう1人は菅原忠夫である。

摺沢村出身で所太郎よりも4歳年上の菅原忠夫は、東京で賀川豊彦（1888-1960）らが進め

ていたキリスト教に基づく社会改良運動¹⁾を知り、帰村して自宅に「三愛塾」を設立し、東磐地域の農村青年のリーダー的存在になっていた²⁾。菅原忠夫は後に当時を回想してこう語っている。「当時の摺沢の農業指導者に偉い人物がいた。農業補習学校教師の松川正先生で、生徒には理想農村の建設を目指せ、と大きな夢を与え、一方、村の農会技手を兼任して、農家には「協同団結」の必要性を説いていた。そのため各部落に《農家組合》が結成され、その組織内に農事部門の外に社会部まで設けて相互扶助精神を育成していた。……松川先生の教え子達はやがて後日創立した《三愛塾》の有力メンバーになっていくのである」³⁾

三浦所太郎青年は恩師松川正の薫陶を受け、村の先輩である菅原忠夫の清新な行動に引き込まれていった。

三浦は、1931(昭和6)年に宮城県で開催された第1回仙台農民福音学校に参加した。そこで杉山元治郎や東北学院のデヴィッド・B. シュネーダー院長に会い、「宮城県下の福音に生きんとする農村青年に接して非常に意を強くして帰村し」⁴⁾た。

杉山元治郎(1885-1964)は⁵⁾当時、全国農民組合委員長として農民運動に活躍していたが、賀川豊彦が「農村更生と精神更生」の理念のもとに1927(昭和2)年に兵庫県武庫郡瓦木村(現・西宮市)の自宅に設立した日本農民福音学校の校長をつとめてもいた。賀川は32年には東京の自宅の近くである東京府北多摩郡千歳村(現・世田谷区)に武蔵野農民福音学校を設立し、自身が校長となった。これらの農民

福音学校には常設の校舎と農場があり、寄宿も可能であったから、講習を受けるために地元のみならず全国から農業青年が集まった。農民福音学校では、賀川の説く「立体農業」-すなわち米作だけに頼らない、米作に不向きな土地を利用した胡桃・栗栽培、畜産、養蜂等とその加工を組み合わせた多角的(=複合)農業経営-が指導された⁶⁾。三浦しめは、1934年夏頃に上京し、武蔵野農民福音学校においてホームスピンの技術を習得している⁷⁾。これらの常設の学校のほかに、農民福音学校の講師らが出張し全国の小学校などを会場にして短期間の講習会が農民福音学校の名でもって開講された。上述の三浦所太郎が参加した仙台での農民福音学校は、この短期間の講習会のことであろう。

賀川豊彦の著書『農村社会事業』(1933)は、彼の農民福音学校での講義録である。その中で賀川は農民福音学校の目的を次のように説明している。

5) 杉山元治郎は大阪府の出身で、大阪府立天王寺農学校在学中にキリスト者となった。その後東北学院神学部を卒業し、仙台市の東六番丁教会、福島県の小高教会の牧師をつとめた。杉山は小高にいた1913年にデンマークのフォルケホイスコーレに倣って農村青年のための学校-小高国民高等学校-をつくったことがある。フォルケホイスコーレとその提唱者グルントヴィは、ホルマン/那須皓訳『国民高等学校と農民文明』同志社、1913年により日本に紹介された。同書出版の直後に上記の小高国民高等学校がつけられた。その後、杉山は大阪へ戻り、1922(大正11)年に賀川豊彦と協力して日本農民組合を設立し、組合長に就いた。日本農民組合は27年に全日本農民組合と日本農民組合に分裂したが、28年に統一して全国農民組合となり、杉山が委員長に就いた。東北学院資料室運営委員会「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会編『大正デモクラシーと東北学院-杉山元治郎と鈴木義男』東北学院、2006年を参照。

6) 1931年に設立された御殿場農民福音学校での立体農業の取組みについて、松野尾裕「御殿場農民福音学校と食肉加工品製造の実践」『愛媛経済論集』第34巻第2号、愛媛大学経済学会、2014年を参照。

7) ホームスパン(homespun)はイギリスの農家で始められた、家庭で羊毛を手染め、手紡ぎ、手織りして作られる織物。ホームスピンの技術は明治時代にイギリスの宣教師により日本に伝えられた。岩手県では現在までホームスピンの技術が継承されている。

1) 松野尾裕「賀川豊彦の経済観と協同組合構想」『地域創成研究年報』第3号、愛媛大学地域創成研究センター、2008年を参照。

2) 摺沢での菅原忠夫らの三愛塾については、松野尾裕「岩手県摺沢の三愛塾運動」『雲の柱』第31号、賀川豊彦記念松沢資料館、2017年所収で論じた。

3) 菅原忠夫『三愛塾の碑-ある口百姓の手記』あづま書房、1992年、38頁。

4) 三浦所太郎遺稿集編集委員会編『三浦所太郎遺稿集 丘の家の囲炉裏から』三浦恵子、1987年、5頁。

「農民に、宇宙観・人生観を確立させ、これが生命となつて、全意識的に良心運動となつて現れるときに、この良心宗教は村を救ひ、国を救ふ大きな力となる。デンマークの農民学校が、聖書を中心とするのは全くそこにある。日本の農村宗教が、お祭りや法事のみを事とし、少しも倫理運動にならず、協同愛の意識を農民に与へない処に、村の生活の行詰りがある」。「私は敢ていふ。もし今日農村を救ふ方法があるとすれば、それは、(一)土地の立体的使用法—それは山岳をも樹木農業によつて開拓することを含む—、(二)近代科学による生物化学的農民頭脳の改造、(三)協同運動による互助愛の確立、の三つのほか、決して道はないと私は確信する」⁸⁾

「三愛」は、農民福音学校の根本理念を示す言葉として賀川豊彦により唱えられた。三愛とは、すなわち、「愛土、愛隣、愛神」—土を愛し、隣人を愛し、神を愛する—を意味している。

1930(昭和5)年に宮城県塩釜教会(現・日本バプテスト同盟塩釜キリスト教会)に齋藤久吉^{ひさよし}牧師(1903-2006)が着任した。大阪出身の齋藤にとって東北農村の生活困窮は想像を超えるものであった。農村伝道の必要を強く思った齋藤は、32年に宮城郡利府村(現・利府町)に伝道所を設けた。献堂式を2月11日に行うと、その翌12日から16日まで、利府伝道所を会場にして第1回利府農民福音学校を開いた。講師には群馬県の日本組合汎川基督教会(現・日本キリスト教団汎川教会)の栗原陽太郎牧師が招かれた。

この第1回利府農民福音学校に三浦所太郎は、摺沢村の友人である青柳隆、和賀辰雄、那須芳吉と共に参加した。三浦たち4人は摺沢から鉄道の線路つたいに徒歩で利府まで来た。同年8月20、21両日に第2回が開かれた。その開催案内を受け取った三浦は齋藤久吉に手紙を

書いた。

「お陰様をもって逆境に泣いた私も日々幸福な生活を続けております。部落一番の不平和な家庭の中から、部落改善のために働く事は肉体上本当に苦しいのですけれど、この一、二年は主の僕としてつかえる幸を心から嬉しくてなりません。農村に対しての先生の御計画には、^{なが}蔭乍ら感謝して居ります。今晚はマックナイト先生が摺沢へ来ます。それで二十名ばかりの部落の友達をつれて行くつもりでございます。……今冬、摺沢でも福音学校を開きたいと計画して居りますが、私にとっては利府及び仙台からの感化が甚大なのです。どうか求道者の私達を御引立てください」⁹⁾

ウィリアム・Q・マックナイト宣教師は、当時、宮城県登米郡米山町(現・登米市)に牧場を持ち、畜産の指導をしていた¹⁰⁾

第2回利府農民福音学校では、静岡県沼津の興農学園長平林広人が講師をつとめた。平林は、『^{デンマーク}丁抹農村文化の真髓』(1930)を著すなど、デンマーク農村・農民文化の紹介に努めていた¹¹⁾

摺沢では、1932年に第1回東山農民福音学校が摺沢家政女学校を会場にして開かれた。翌33年には第2回東山農民福音学校が、菅原忠夫の自宅に建てられた三愛塾舎を会場にして開催された。この第2回には武蔵野農民福音学校から藤崎盛一と大崎治部が、西宮の日本農民福音学校から升崎外彦が講師として招かれた。

三浦所太郎は升崎外彦牧師より砂鉄川¹²⁾で洗礼を受けた。

34年8月11日に賀川豊彦が、大崎治部と賀

8) 賀川豊彦『賀川豊彦全集』第12巻、キリスト新聞社、1963年、61~62、74頁。

9) 角谷晋次『みちのくの三愛運動—宮城県利府村・岩手県山形村のキリスト教成人教育』キリスト新聞社、1993年、31~32頁。

10) 仙台東教会HP「風信子(ヒヤシンス)だより」に掲載されている「マックナイト物語」①~④(2015年1月~4月)を参照。

11) 平林広人『農民の国デンマーク』文化書房、1924年、同『丁抹農村文化の真髓』文化書房、1930年。

12) 砂鉄川は一関市東山町を流れ、北上川に合流する。流域に景勝地の梶鼻溪がある。

川の長男純基を伴って摺沢村を訪れ、「農村更生の原理」と題して講演し、その夜は三愛塾舎に一泊した。この時にイエスの友会¹³⁾ 東磐支部の発会式も行われた。三浦は賀川豊彦に会った感激を日記に書いた。「私は初めて会ったのであるけれどもなんとなしになつかしい。他人の様な気がしない。本当の神の使徒の様に思われた。……[翌日] 停車場で先生は私に手をかけて「しっかりやってくれ給え。私のところに泊りに来給え。」と世界的偉人の先生はにこにこ云ってくれる。感激にみちた私たちを残して汽車はたった。かたいかたい握手。先生程強い握手をして貰ったことがない」¹⁴⁾

賀川は、翌35年1月に東磐井郡興田村(現・一関市大東町沖田、鳥海、中川)を訪問した。この時のことを賀川は次のように記録している。「その日午後一時から、小学校で講演した。村の有志者二百五十名位と高等小学校の生徒約三百名が私の話を聞いてくれた。話がすんだのが、暮れ方の四時頃であつたが、夕飯を興田の青年達と一緒に食つた。摺沢村のイエスの友から七人位の者が或は徒歩で、或は自転車でやつてきてゐたので、その晩は村を復興する方法についてゆつくり話した。こゝは盛岡の聖公会村上牧師の伝道地で、汽車から降りて約二里〔約8キロメートル〕ばかり山奥に這入らなければならぬ高原地帯であつた。……翌日は新聞紙を四つに折つて、胴といはず肩といはず、鎧のやうに着込んで朝五時に起き、真暗な雪道を摺沢駅に走つた。摺沢駅で見た曙の空が今も忘れられない」¹⁵⁾

賀川豊彦の話をお聴くために摺沢から来た7人の中に、おそらく三浦所太郎もいたであろう。

13) イエスの友会は、1921年に賀川豊彦ら13人の牧師により結成されたキリスト教の超教派の団体。労働者や農民信徒と教職(牧師)との同志的交わりを目指した。活動は現在も続いている。機関誌『火の柱』を発行している。

14) 『三浦所太郎遺稿集』235～236頁。

15) 賀川豊彦『賀川豊彦全集』第24巻、キリスト新聞社、1964年、200頁。

利府農民福音学校のほうは、第1、2回が開かれた後、冬と夏の年2回の定期的な開催を続けた。斎藤久吉は利府農民福音学校を常設の学校として発展させることにした。1935年1月にウィリアム・アキスリング宣教師と関東学院の坂田祐院長の協力を得て資金を工面し、1町6反歩(約1.6ヘクタール)の原野を入手して、ここに聖農学園を設立した。

三浦所太郎は利府農民福音学校に続いて、聖農学園に通った。そして、36年から1年間、聖農学園に農場管理者として住み込んだ。三浦はこの間、農民として生きるのか、農村の指導者となるのか悩んだが、斎藤牧師のアドバイスもあり、農村指導者となる決意をし、学問を積む道を進むことにした。摺沢の実家は弟が継ぐことになった。

(2) 勉学の道

1937(昭和12)年春、24歳になった三浦所太郎は聖農学園農場管理者を辞して横浜へ行き、関東学院中等部の3年次に編入学した。八木一男や学院長の坂田祐らに学んだ。翌38年からは夜間に開講されていた新共同神学院(額賀鹿之助院長)に通い、協屋義人牧師、靱井常五郎牧師、湯浅与三牧師の教えを受けた。40年に関東学院を卒業した三浦は、玉川学園専門部農科に入学し、農業を学ぶと共に、学園長の小原国芳の教えを受けた。42年に玉川学園と新共同神学院を卒業して、同志社大学神学部へ入学し、濱田與助教授の指導を受けた。

三浦は、同志社大学在学中に陸軍から2度の召集を受け、45年10月に復員して大学へ戻ったところ、濱田教授から宗教哲学者の波多野精一が戦時中に東磐井郡千厩町(現・一関市)に疎開し、同地に滞在していることを聞き、直ちに帰郷した。千厩は三浦の生まれた摺沢の隣の町である。そして、「出来得る限り波多野精一先生の御人格に自らもふれ、他の同信の友達もふれる様に努力した」¹⁶⁾ 46年春には摺沢に濱田教授を招いて「波多野哲学講座」を開催した。

波多野は47年4月に玉川学園に招かれて千厩を離れたから、東磐地域の青年たちとの交流は1年余りで終わりを告げたが、波多野の感化力は大きなものがあった¹⁷⁾

波多野精一が千厩を離れることが決まると、三浦は、札幌の黒澤酉蔵のところへ行き、酪農を学ぶことにした。札幌教会の白戸八郎牧師が三浦を黒澤へつないでくれた。1925(大正14)年の北海道酪聯の設立¹⁸⁾に尽力した黒澤は、34年に酪農業の教育組織として酪農義塾を設立した¹⁹⁾酪農義塾は戦時中に興農義塾野幌機農学校と改称し、全寮制による酪農教育を続けていた。三浦は野幌機農学校の第三農場長兼第三寮長に就いた²⁰⁾

農業経済を学ぶ必要を感じた三浦は、48年3月に野幌機農学校を辞し、京都大学農学部の聴講生となり、大槻正男教授から農業経営や農業簿記を学んだ。49年秋に三浦は利府の聖農学園へ戻り、1年余り農場で働きながら塩釜教会の伝道の手伝いをし、また登米郡の酪農を指導した。51年には、三浦はホームスパンの技術を学ぶために岩手県和賀郡土沢町(現・花巻市東和町土沢)の及川全三のところへ赴いた。

16) 『三浦所太郎遺稿集』8頁。

17) 三浦所太郎「千厩時代の波多野精一先生」『波多野精一全集 第5巻月報』岩波書店、1969年所収、『三浦所太郎遺稿集』215～219頁、同「おじいさん」『追憶の波多野精一先生』玉川大学出版部、1970年所収、『三浦所太郎遺稿集』212～214頁。

18) 1925年に有限責任北海道製酪販売組合が設立され、26年に保証責任北海道製酪販売組合联合会(通称、酪聯)に改称された。戦後、雪印乳業(現・雪印メグミルク)となった。

19) 松野尾裕「二人の協同組合主義者 黒澤酉蔵と賀川豊彦-『乳と蜜の流るゝ郷』によせて」『日本経済思想史研究』第13号、日本経済思想史学会、2013年所収、同「グルントヴィと北海道酪聯の開拓者たち-宇都宮仙太郎と出納陽一を中心に」矢嶋道文編『互恵と国際交流』クロスカルチャー出版、2014年所収、同「賀川豊彦と黒澤酉蔵-相互扶助の思想にもとづく教育と実業」『賀川豊彦学会論叢』第24号、2016年所収を参照。

20) 野幌機農学校での三浦所太郎の教師ぶりは、三浦の書いた「馬鹿寮長ものがたり」(一)～(五)に描かれている。『三浦所太郎遺稿集』83～87、92～94、105～107、119～122、139～144頁。

及川は柳宗悦の民芸運動の影響を受け、岩手県におけるホームスパンの第一人者であった。

盛岡生活学校(現・盛岡スコール高等学校)校長であった吉田幾世²¹⁾は、三浦所太郎を追想した一文の中で、及川全三のところでは三浦と会った時のことをこう書いている。「高村光太郎先生のおすすめで、私の学校に及川先生が教えに来て下さるようになり、打合せ等で私は度々土沢のお宅へ行ったのですが、三浦先生は農村文化運動の一環として及川先生のお家へ住み込みでホームスパンの勉強をしておられたのです。及川先生は御自分にも他人にも、それはきびしく、何かにつけて大変に気難しい方でしたから流石の三浦先生もてこづられた様子で「あの気難しい及川先生をああして学校へつないでいるということ、ただのお嬢さんに来ることではない。吉田さんを見直した」といっておられたと人づてにききました。私も又「出て行け」とどなられ乍ら、じっと耐えて勉強を続ける三浦先生を見直したのです²²⁾

この頃、三浦は郷里に「東磐高等酪農学校」をつくった。学校とはいっても、校舎はなく、各地で酪農経営の講習会を開き、実地指導をした。そうした活動をする中で大原町(現・一関市大東町大原)当局が動き、53年に「大原酪農農場」が建設され、三浦がその農場長に就いた。

摺沢では濱田與助が「哲学講座」を続けていた。53年夏に濱田が日本ルーテル教会の稲富肇牧師を伴って摺沢に来た。稲富は三浦に北欧への留学を勧める話をするために摺沢へ来たのである。摺沢に「三浦北欧留学後援会」が組織

21) 吉田幾世は、盛岡友の会を拠点にして、1933年に、羽仁もと子の提唱した「生活即教育」を実践する盛岡友の会生活学校を創設した。戦後、盛岡生活学校、向中野学園高等学校を経て、現在、盛岡スコール高等学校となり、そのユニークな教育事業が継続している。向中野学園・吉田幾世『生徒たちに語った私たちの学校の歴史』(改訂版)学校法人スコール盛岡スコール高等学校、2012年を参照。

22) 『東北ミッション 農民宣教学校』第9号(1987年8月20日)、16頁。

された。そして三浦は1955年から3年間、ノルウェーのイエンネスタ園芸学校へ留学し、北欧諸国の農業と農村生活を実地に学んで帰国した。この時、三浦は45歳であった。

(3) 山岳傾斜草地農業の実験

三浦所太郎は、北欧留学から帰国すると、岩手県農業会議畜産コンサルタントに就き、酪農指導に当たった。そして三浦の同志である菅原喜重郎²³⁾が1963(昭和38)年から東山町長に就き、65年に町営の畜産センターが設立されると、三浦がその所長に就いた。ここで三浦はヨーロッパで学んだ山岳傾斜草地農業の実験を開始した。賀川豊彦が説いた立体農業に本格的に取り組み始めた。

三浦は、藤崎盛一の編集になる『農民福音学校－農民福音学校50周年記念誌』(1977)²⁴⁾に一文を寄せ、その中で、山岳傾斜草地農業の実験をこう説明している。

「ここは標高四百米、三十五度前後の急峻傾斜地で岩と石のごろごろしている所です。造林地伐採跡なので直径六十センチ位の切株がそのままになっています。牧草種子は湿度と温度で発芽するのですから、不耕起のまま施肥をして播種しました。覆土の必要はなく、立派に発芽もし生育もしています。二十四ヘクタールに昨年は七十六頭の育成牛を百六十四日放牧して増体重の平均は百二キロ、最高は百八十キロ、最

低は六十キロとなり、受胎率は九十九%の成績となりました。牧草収穫は年間坪刈り平均から計算して、一万キロ以上になっています。乾草収量は、本年の放牧期間中自由採食に毎日給与してもあり余るのです。ドイツのホーヘンハイム改良輪換放牧方法にヒントを得て、それを更に追求し日本改良輪換放牧と命名した小生の研究を実践しているのです。牛に教えられ草に学ばされ大自然にはげまされている毎日です。日本総面積の八十%を生産の場にしたいと願った初心は着々と実現しているのです。急峻傾斜地の草地造営法にも合理的な方法が見つかりました」²⁵⁾

輪換放牧とは、放牧地をいくつかの牧区に分け、草生に応じて牧区ごとに順次放牧する方法である。上記の一文からは、三浦がヨーロッパの山岳傾斜草地農業を応用した日本の立体農業の確立に一心に打ち込んでいた様子がよくわかる。そして三浦はこう述べている。

「小生は日本の山々を草地農業の場だけに利用しようとは考えていません。園芸の場、森林の場、人材養成の場として小生なりの研究を進めています。……我ら同志の中から大小の政治家出でよ、大小の実業家出でよ、大たんな教育者出でよ、学問を総合した内容ある人材の専業農民出でよ。そして仲よく助け合いつつ世の光になりたいと思います」²⁶⁾

2 東北農業協会

(1) 東北農業協会の設立

三浦所太郎は1972年に心筋梗塞で倒れ、山岳傾斜草地農業の実験は終了を余儀なくされるかに見えた。しかし三浦は、「日本山岳傾斜草地農業の学園を創設したい」²⁷⁾という願いから、仲間と協力して東山町長坂に4ヘクタールの山

23) 菅原喜重郎は、1926年、岩手県東磐井郡長坂村(現・一関市東山町長坂)に生まれた。利府村の聖農学園で学び、60年同志社大学神学部卒業。61年ノルウェーに留学し、ステンド農学校、イエンネスタ園芸学校で学ぶ。63年東山町長に就任し、5期在職。83年衆議院議員に初当選し、その後4選、2001年に辞任した。著書に菅原喜重郎編著『西洋哲学要史－西洋哲学要史・波多野宗教哲学(時間論)素描』東洋出版、2016年がある。

24) 藤崎盛一は、戦後、武蔵野農民福音学校が閉じられると、瀬戸内海の豊島に移住して、豊島農民福音学校を開き、晩年までそこで過ごした。豊島は戦時中に賀川が官憲の監視下で自給生活をしたところである。藤崎盛一『農民教育五十年－乳と蜜の流るゝ郷を求めて』豊島農民福音学校出版部、1976年を参照。

25) 農民福音学校・藤崎盛一編『農民福音学校』立農会、1977年、131頁。

26) 同上書、132頁。

27) 同上書、133頁。

を入手した。ここを傾斜草地農業の実践と農民生活文化振興のための拠点にしようと考えたのである。

三浦は畜産センター所長を退くと、東山町長坂の山を整備し、1974年に自宅を完成させた。快復が見え始めた79年4月に、三浦は『丘』と題した謄写版刷りの個人通信を発行することにした。その第1号に三浦はこう書いた。

「私は今、東南斜面の雑木林の中に屋敷をつくってくらしています。鉄道の無人柴宿駅から徒歩八分できます。住宅団地を通りぬけて道路は松と雑木の中に入ります。そこから私の独立国です。道路は私の屋敷で終りとなり雑木林の山が展開しています。郵便配達さん以外は外来者を見かけることは少ないところです。ここで野菜畑を耕し、山羊二頭を飼っています。妻は出勤、娘二人は中学と小学に行ってしまいますので、山の中はいよいよ山臭い昼になります。土と汗にまみれ、数多い野鳥のさえずりに時をわすれ、航空路に往来する白銀の粒を見あげては海外の友人たちへの夢をふくらましていきます」²⁸⁾

居宅とは別に仲間の集会所となる建物が建てられた。1階の囲炉裏のある部屋には、賀川豊彦の筆になる「愛土、愛隣、愛神」と書かれた扁額が掲げられた。2階には畳敷きの部屋が設けられ、集う仲間たちが宿泊できるようにした。そして、その玄関に三浦が墨書した「東北農業協会」という字が彫られた大きな一枚板が掲げられた。

79年6月11日、仲間のすすめで「看板開き」の集いが行われた。農業補習学校生徒時代の恩師である松川正をはじめ、摺沢で三愛塾を創設した菅原忠夫、のちに三浦が没したあと東北ミッション（後述）を引き継ぐことになる藤森守彦ら12名の仲間が参加した。この日のことを三浦は、「松川先生と菅原氏の話聞いて決意を新たにさせられたことは、数名でよいから



写真1 三浦所太郎の自宅の傾斜地に建てられた東北農業協会の建物



写真2 賀川豊彦から贈られた書「愛土 愛隣 愛神 一九三四・七・六 為三愛塾 賀川豊彦」



写真3 三浦所太郎の揮毫した「東北農業協会」の字が彫られた桂の一枚板

28) 『三浦所太郎遺稿集』21頁。

本当に理想や希望を一つにして協力するならば歴史がつくられて行く。私たちの生活は歴史の創造に加わることが一番いいことだと感じさせられました²⁹⁾と書いた。

そして三浦は、東北農業協会への思いをこう述べた。

「東北農業協会は、東北の農業を縁にして、互に良い心と良い力を出し合って助けあい、交わりを深めて行く集りです。農業に縁のある者たちが互に語りあい、互に生長発展していくことは、私たちの生活に人格的希望を与えます。……私は、東北農業は人格的生活をするための経済的一手段だと考えてきました。それですから生産に知性と技術の能力を十分に発揮していくことをのぞんでいます。しかし、収入が多くなり生活が文化的になりさえすれば大成功、義理も人情も組織も自己目的の極限まで利用し、目的に到達すればそれらを捨ててもいいとは思っていません。物質的豊かさと文化的豊かさを人格的豊かさに包み、倫理、道徳、芸術、学問、富、健康を一如に生きる人に成りたい、家庭になりたい、村落になっていきたいと願っています。この実現を夫婦の間に、親子の間に、隣人の間に、即ち家庭から村落にひろげたいとの祈り心です。まず、この様な構想で東北農業協会をみんなで育てていきましょう」³⁰⁾

体調を少しずつ快復させていった三浦は、東北農業協会を拠点にして、農民生活改善とりわけ食生活改善の提起と、農業（酪農）指導のために東北各地へ精力的に出かけ、講演会や研修会を持った。東北農業協会としての活動は、1979年4月から84年4月までの5年間続けられた。

(2) 「予言」・「預言」としての農業

三浦は、自身が追求してきた東北農業と、日本政府が進める農政によって変わろうとしてい

た農業の現実との大きな隔たりを自覚しないわけにいなかった。

そのことについて、三浦は、79年5月発行の『丘』にこう書いている。「智的な友人から「新鮮で質の良い食料を豊富に安く供給してくれることを、国民の多くは農業に期待している」と言われたことがあります。「日本の肉は高いね、牛乳も高いのよ」と外人の奥さんと言われたこともあります。……私の農業に関する研究と主張は、国土の未利用地を農畜林へ利用すること。水田一毛作を多毛作にすることでした。しかしこれは国の政策とはならず、時代おくれの主張になりました。高度経済成長の風潮に同調した経済・政治・教育に関係する友人たちも、都市の論理から農業及び農村を評論するようになっていきました³¹⁾

東北農業協会を発足させた時の三浦の心は決して晴れやかなものではなかった。高度経済成長の呪縛にとらわれた日本社会では、「都市の論理」でもって、安価で多量の食料と飼料の輸入促進、及び国内農業の機械化・大規模化を論じる者が多く現れた。三浦が目指してきた家族労働を主力とした小農による有畜複合農業は、「時代おくれ」になったかのように言われた³²⁾

三浦は、東北農業の将来をどう語っていけばよいのか、考えていた。「だまって聞いているから言う方が正しいと思ってはいけません。私たちは重く深く逆なことの考えが多いのです」³³⁾

そうした中で、三浦は、まず自宅の農園づくりを進め、不耕起牧野の造成にとりかかった。そして、農文協仙台支店から「食生活」のスライドを購入し、地域の家庭集会でそのスライドを用いて「食生活と家政経営」の研修会を精力的に行っていた。

そして、三浦は、79年の暮れに発行した『丘』に、「予言」「預言」と農業」と題した文章を

29) 同上書, 31頁。

30) 同上書, 18頁。

31) 同上書, 23~24頁。

載せた。その中で、三浦は、「誰よりも先に感づいていて、実行しながら語ることを予言」といい、「神の意志だと確信して語ることを預言」というと述べて、こう語っている。

「しかし、せんかたががつきてしまったわけではない。やればやれる道がいくらでも農業に啓かされている。農を生きることによって安定した「人」の生活も創造される。門を叩けばひらかれるのである。北上の1,000メートル以上の高地に「学園」と「村」をつくりたいと主張して今日にいたっているが、この夢は実現したい。生活や生産には悪条件が揃っている所で、人類の理想とする物心両面の豊かで高度な生活をするところこそが、人々のよき「指針」となり得るとおもうからである。自然的、社会的、悪条件の克服には各々の英知と他者との協力が必要である。この開発には「人間」を「人らしく」す

32) 岩手県紫波郡紫波町の志和農業協同組合（現・岩手中央農協志和支所）で1960年代から70年代に精力的に取り組まれた「志和型複合経営」の意義について論じた、玉真之介「複合経営の理論と実践－佐藤正」大田原高昭・中嶋信編『協同組合運動のエトス－北の群像』北海道協同組合通信社、2003年所収を参照。志和型複合経営とは、小農による、稲作を基本として和牛肥育・育成・繁殖、養豚、酪農、養鶏、椎茸、りんご栽培等を加えた有畜複合農業経営のことである。その理論と実践を率いたのが佐藤正（当時岩手大学教授）と熊谷久（当時志和農協専務理事）であった。有畜複合経営は70年代に農家から支持され、全国的に注目されてもいた。しかしながら、85年のプラザ合意以降の円高とそれに続くグローバリゼーションの中で、「有畜複合経営は、理論としては正しくとも、現実の今の農家の中で実践するのは難しい」という意見が農家から出されるようになった（上掲書、188頁）。しかし、「グローバリゼーションが極限まで進みつつある現在に至っても、複合経営論は光を失っていない」と玉は述べ、「輸入農産物による価格低迷がここまで来ると、もはや規模拡大や法人化などの農政が示す路線でどうにもならないことが誰の目にも明らかである。……そこで農家が営農と生活を守っていくには、やはり兼業や自給も含めた意味での家族農業、本来的な「自然循環と生態系を利用する複合経営」へ立ち戻って行かざるを得ない」（同、190頁）と述べて、論文を結んでいる。

本文中で述べる通り、三浦所太郎はこの志和地域の複合農業経営を高く評価している。

33) 『三浦所太郎遺稿集』24頁。

る自他共々の学問、道徳、技術をみがき、それを清めて用いることを怠ってはならないのである。……全てをいかしながら自らもいかされる。そういうことを日常に無理なく生きる農業者になりたい、村落をつくっていききたいと思っている」³⁴⁾

この一文は、三浦所太郎の東北農業宣言である。

(3) 農家・農業・農村論

三浦所太郎が東北農業協会の活動を通して主張したことを、①農家の食生活の再確認と自給、②家族労働を基盤とした農業経営の実行、そして③集落社会の再建の3つにまとめてみよう。

①農家の食生活の再確認と自給

今日の農業は経営規模を大きくすればするほど、機械代、資材代、肥料代、農薬代、利子代その他の支出が増える。だから、「今の今は現金収入だけを目標に農業経営をしなければならない」し、そうした「お金にする農畜産物は急には変えられないでしょう」。こう三浦は農家に語りかけ、そして次のように提案した。

したがって、まず、農家の家族だけは「健康を増進する食生活をする事です」。すなわち「堆厩肥や他の肥料を合理的に施用し、薬害のないように栽培管理して、自分の家の分だけの自給食料を、できるだけ多くの種類をつくることです」³⁵⁾

例えば、10羽くらいの鶏を平飼いにし、山羊1頭、豚1頭を飼えば、本当の卵、鶏の肉、山羊乳、ヨーグルト、チーズ、さらにハムやソーセージもつくれるはずである。燻煙室は簡単につくれる。麴づくりも出来る。パンも常食になっているから、パン釜もつくる。ジャムやジュース、果実酒もつくる。このようにして、「好きなように種をまき、楽しみながら作物か

34) 同上書、47頁。

35) 同上書、159～160頁。

ら目をはなさずに手入れをすれば理想的な食事
が出来るようになります。「私たちの実行した
いのは先ず栄養のバランス, そして香りと新鮮
なごちそうを毎日食べることです。この積み重
ねが口から健康を守ることになるからです」³⁶⁾

そして三浦はいう。「この方式でやっている
若夫婦がこの頃ふえています」³⁷⁾

②家族労働を基盤とした農業経営の実行

「農業は農家が最高の文化生活をするための
経済的一手段」であって、「農業を金もうけだ
けの生活にしてはいけない」³⁸⁾ というのが三浦
の主張である。そして、農家が最高の文化生活
をするということは「家族がそろって農業を生
きること」だ、と。「それには、自分たちに必
要な農畜産物を家族一同で生産し、それを自分
たちで上手に消費生活しながら他の作物や畜産
に力をいれることです」³⁹⁾

三浦は、現今の日本の農政に対し、「日本の
農家の耕地が狭小すぎるから兼業農家を減らし
て専業の農家を育成すべきだと、主張されるこ
とが多くなりました。山村の自然的条件と山村
文化を知らない人たちの主張だと思えます」⁴⁰⁾
と意見を述べた。三浦は、北上山系の「北方山
村型」地域において、山岳傾斜草地農業を追い
求め、「それなりに一面を拓いてきた」と自負
を示し、「小農が耕地を手放そうとしないの
は、経済がわからないからではありません。私
たちの先祖たちが社会的底辺にありながらも、
百姓を通して生命をまもってくれたのは土地の
利用と所有だったからです。せまい土地、悪い
土地を上手に利用しようとするれば土壌学的に生
態学的に求めなければならない、私たちのさし
せまっている課題であります」⁴¹⁾ と説いた。

そして三浦はこう述べた。「このごろになっ
てわかってきたことは、技術や学問や教育や地

位名誉、富だけでは百姓の私たちは「幸い」に
なれないということです。「私たち農業者とそ
の家庭が「さいわい」になるのには、小さくま
とまって、大胆に実行して行くという、自分た
ちの「やる気の結集」と継続であります。私は
そう思うようになりました」⁴²⁾

③集落社会の再建

三浦はいう。「今までは、強い時の力に押し
まわれ、只利用され、使い捨てにされてきて
いるのが集落⁴³⁾であった。この弱い集落の不
死身の強さは耕地を所有し、家族労働力を保持
していることである。如何なる変動が社会に生
じても、耕地と家族労働力があることによっ
て、自らも生き、隣人も生かし得る条件に恵ま
れているのが集落である」⁴⁴⁾

しかし、農政の基本方針はどうであろうか。
それは、「農家の規模拡大」と「徹底した機械
化、化学化、技術化」により生産費を引き下
げ、大量生産を可能とする「中核農家を育成す
る」というものであり、「小農と零細農は生産
者とみなされないから、切り捨てて自然死に
いたらしめるというやり方」である⁴⁵⁾

この農政の基本方針に対し三浦は、次のよう
に述べて真っ向から批判した。「だが、規模
拡大、機械化、経営の合理化をかかげて着手し
ているモデル農村はどうだろう。莫大な予算を
投入しての秋田の大潟村、北海道の別海村の新
農村建設事業等のあり方を見て、我々の学ぶと
ころを見出すことができない。中核農家の育成
は手でもむようなわけにはいかないのである」⁴⁶⁾

「中核農家の育成」とは反対に、小農の結集
によって集落を再建しようとする事例を三浦は
挙げる。すなわち、「これとは対蹠的に小農の
集落をよくしようとして努力しているところが
全国にかくれている。一例をあげれば岩手^{かね}の金

36) 同上書, 160~161頁。

37) 同上書, 160頁。

38) 同上書, 149頁。

39) 同上書, 150頁。

40) 同上書, 150頁。

41) 同上書, 151頁。

42) 同上書, 153頁。

43) 三浦は「聚落」と書いているが、本稿では、今日
の一般的な表記である「集落」と書き換える。

44) 『三浦所太郎遺稿集』133頁。

45) 同上書, 134~135頁。

がさきちよう
ケ崎町の酪農地域，しわちよう
紫波町の志和地域の複合
経営集落である。そのすばらしい成果は集落民
と其処出身の指導者によるものである。集落の
小農と零細農の力と意志を活かした英知の結集
こそが、個別経営と生活を大切にしながら集落
の自主活動へと展開する」⁴⁷⁾

三浦は農畜産物の消費者へ向かって問いかけ
もした。「一体、食料消費者たちはどんなもの
を食べたいのであろうか。……これからの消費
者は新鮮で健康な食品を要求すると思うがどう
だろう。そうだとすれば、健康に土を管理し得
る小農と零細農の結集から生産されるものが、
相手とならざるを得ない」⁴⁸⁾

小農、零細農とは家族労働力で経営し得る農
地を所有し、耕作する農家のことである。その
結集は「伝統と技能と人柄によって多様な社会
である。……集落は農業経営の好条件にめぐま
れた所に少ない。悪条件を克服し、工夫と努力を
し、仲よく、はげましあい、助け合うところに
多いことはご承知の通りである」⁴⁹⁾

そして三浦はこう述べている。「今のところ
集落の人々の経済は恵まれているが、不安が九
十九パーセントである。経済的に行詰れば全生
活が行詰ることを知っているからである。だが
それだけでない。自分でも明示されないものも
とめてている。私たちはこの求め方を大事に育
てたいのである。語り合い、助け合い、何かを

そこから実行しはじめると、力と心の結集が強
く展開する。こうしたことをつみかさねが経済
的なことも含めた、和やかでたくましい要求へ
と生長していくことをいくつも体験させられて
いる」⁵⁰⁾

東北農業協会の活動は、1984(昭和59)年の
春まで続けられた。三浦は83年に左大腿腰部
から腫瘍を摘出する大手術を受けており、そう
したことが、三浦の活動を制約したのである。

三浦は、個人通信『丘』最終号(1984年4月)
に、「百姓の私は想う」と題して、自身の思い
のすべてを吐露するように、長い文章を書いた。

「追いつき追いこせとはげまされ、私たち農
民もそのつもりだったことは、皆様ご存知の通
りです。目標は都市と農村の生活格差のことで
した。農民が都市生活者の生活レベルへ追いつ
き、追いこすということは、今日この目標は殆
んど達せられたようです。……農家も都市生活
者並になって、生活用品の殆んどが買わねばな
らなくなりました。今の農家は売るために生産
し、売ったお金で生活することになり、生活は
都市と同じになっています。だから、今ごろ、
自給自足的なことを充分にとり入れた農場や農
家になりましたと主張しても耳を傾ける方が
まことに少ないのです。農村や農家を豊かにす
るということは、農民独自の豊かさではなく、
これらの人が利用されて経済人、政治人、教育
人、宗教人にとって大変都合よろしくしまれ
てしまっているのです。……経営をよくしよう
として借金をしたのに、その借金に苦しむ人た
ちの多いのは、農民自身と経営だけに責任があ
るのでありません。農民をとりまく社会のしく
みの中に大きな責任があります」⁵¹⁾

「一体全体、人の毎日食べるものを、健康な
大地から生産することをやめさせるようにし
て、土を不健康にするような経営生産をし、不

46) 同上書、135頁。新農村建設事業とは、1950年代
に計画され、順次実施された国策による大規模農地
造成事業のことである。大潟村の新農村建設事業は、
1957年から77年にかけて秋田県の八郎潟を干拓し、
1万7,000ヘクタール余りの農地を造成、全国から
入植者を募り、米作中心の大型農業を作り上げた。
また、1973年から83年にかけて根室市、別海町、中
標津町において新農村建設事業が実施され、約1万
5,000ヘクタールの農地を造成し、200戸余りが入植
して、大型酪農経営を作った。

47) 『三浦所太郎遺稿集』135頁。岩手県胆沢郡金ケ崎町
は県南西部に位置し、地勢は西の山岳高地から東の
平坦地との間で1,300メートル以上の標高差がある。
山麓地域で酪農が行われている。岩手県紫波郡紫波
町は盛岡の南、県中部に位置する。注32)を参照。

48) 『三浦所太郎遺稿集』135～136頁。

49) 同上書、136頁。

50) 同上書、137～138頁。

51) 同上書、168～169頁。

健康な食物に更に必要以上のものを添加したりして、人類の生命を不健康にすることを熟知していながらの行動に誰も責任を感じないのはおかしいです。今、人類の人口は四十五億人を超えていると言います。その中、毎日四～五万人が餓死しているとのこと。経済的利己主義の横行が農地や緑地を砂漠化しつつあることの結果なのです。儲かるのであれば、弱い者も国も悪用してもうけて行こう。或いは戦争を前提にして、死の工業、死の商業も盛んにして行こうという強国大国、文化国家の行動に心をいためないのはどこか狂っているのです。四十五億以上の地上の友達へ、毎日食料をつづけ、その生涯を全うさせてやりたいと思う一農民の私たちは、これで地球上はよいのかと深く考えながら行動したいと思えます⁵²⁾

「かつて私は、岩手県畜産コンサルタントをしたり、県農業会議にたのまれたりして全県下を歩きまわり沢山の農家に接することができました。又、草地農業の関係で北海道から九州までの農家にも接することができました。そしてわかったことは、困っている農家は夫婦の協力がまずく、向上途上の農家は夫婦仲が良く明るく活気があり、親子の仲も良かったことです。……百姓とは姓が百あることだと私は解しています。農業をして行くには百人分位の内容が必要だということです。私たちが今百人分位の内容を得るのには教育を活用することが近道です。教育とは何でしょう。考えると現実の教育上の問題が思いうかんできます。私達の主張する教育は大学院も大学の教授もいらないので。互に教えあい、育てあう、心の交わりからの出発です。心の交わりに一番大切なことは尊敬です。尊敬し合うことをぬいたら協同は出来ないし慈悲も愛も成立しないのです。尊敬し合いながら教え合い、助け合えば百人分の内容になるのです⁵³⁾

三浦所太郎は、若き日の1934年8月に賀川豊彦から堅い握手でもって「しっかりやってくれ給え」と託された「農村更生と精神更生」について生涯をかけて思索し続け、行動してもきた。三浦は、その自らの過去と現在をもう一度確かめながら、地球の上で自身が立つべき位置を語りきった。農民福音学校の教えに出会ってから半世紀が経っていた。

3 東北ミッション

(1) 農民宣教学校

1984(昭和59)年に、東北農業協会の活動に一区切りを付けた三浦所太郎は、東北ミッションを設立し、「農民宣教学校」を始めた。三浦は83年晩秋に仙台の戸枝義明牧師を訪ね、戸枝に人生の最後を懸けた新たな構想を語り、決断した。

三浦は、この東北ミッションによって、かつて賀川豊彦が提唱し、運動した農民福音学校を再建しようとしたのである。そのことを三浦は、「東北ミッションのめざすもの」と題した文章において、次の通り、はっきりと述べている。

「賀川豊彦先生の「農村の精神更生と経済更生」の理想と祈りの実践は日本各地の農村での講演と共に、昭和二年から農民福音学校を通して行われました。日本農民福音学校、武蔵野農民福音学校、^{てしま}豊島農民福音学校の卒業生は、約一二五〇名ほどになっています。新庄、利府、野辺地、東磐、その他の日本各地でも農民福音学校が開かれました。また三愛塾運動も活発になり、農村と農民への農業を通しての精神運動が行われ、これらの参加人員はかなり多数になっています。土を愛し、隣人を愛し、神を愛する三愛精神、乳と蜜の流れる里づくり、立体農業の実践、農民自らの高い文化と人格的生活等々が、福音学校に関係した人びとの生命となって今日にいたっています。しかし、現在は農民と農村の対象は、益々大きく複雑になって

52) 同上書, 170～171頁。

53) 同上書, 173頁。

来ました。食糧の安全保障と自由化を、どのようにすればよいのか、エゴイストにならずに国内と世界を等分に見られる平衡感覚が大切になっています。日本農業における規模の経済性をどのようにしていけばよいのか。日本経済において農業は、どういう位置にすればよいのか。農家負債の問題等々、その他多数。頭の痛くなることばかりです。政治のことも、経済のことも、教育のことも、どのように実行していけばよいのか、と是非明らかにしていかなければならぬことばかりです。これを本当に確信をもって生きていくには、自然と、文化と、宗教の関係性を明らかにし、人格の場から処理しなければならぬと思います。それには、農民福音学校教育の精神構造をもっと深める必要があります」⁵⁴⁾

第1回農民宣教学校は、84年3月19、20両日に、山形県最上郡最上町の家庭集会所を会場にして開かれた。仙台から訪れた戸枝義明牧師が当日のことをこう記している。「三月一九日、といっても山形県の北、最上町は冬のまっ最中でした。羽前向町の駅に降りたった私たちはまず雪の深さに驚かされました。そこから六キロ、一九四五に入植し営々として築き上げた栗林さんのお宅、その集会所が今回の会場でした。秋田をのぞく東北五県から「東北ミッション」に賛同する人びとが燃えて集い、第一回の「農民宣教学校」が開かれました」⁵⁵⁾

出席者は青森、岩手、山形、福島、宮城の東北5県及び東京から合計22名であった。三浦所太郎と戸枝義明によるそれぞれの講演が行われ、講演の後は自由な発言があり、夜遅くまでストーブを囲んでの経験談が続いた。翌日には「東北ミッションナリーの形成、その内容と方向について」の検討が行われ、終了した⁵⁶⁾

各回の開催日、開催地、出席者数、講演の演題等は以下の通りである。

54) 『東北ミッション 農民宣教学校』第1号(1984年6月15日)、1頁。
55) 同上誌、2頁。

第1回 1984年3月19・20日 22名出席

開催地：山形県最上郡最上町前森 栗林家集会所

講演：三浦所太郎「東北ミッションの理念と将来」

戸枝義明「国際化時代の日本農業とキリスト者」

第2回 1984年6月29・30日 24名出席

開催地：山形県東田川郡朝日村大字田^{たむぎまた}麦俣
月山温泉溪流荘

挨拶：三浦所太郎

講演：佐々木宗七郎(酪農コンサルタント)
「酪農指導について」

戸枝義明「今日の神学の問題」

吉沢喜美男(ちくまヶ丘農場経営)
「農業経営の諸問題について」

各地体験リポート

第3回⁵⁷⁾ 1985年4月

開催地：岩手県東磐井郡東山町長坂 三浦所太郎宅

第4回 1985年11月8・9日 41名出席

テーマ：農村と生活と文化と

開催地：宮城県宮城郡宮城町芋^{いもざわ}沢字青野木
257-1 ドミニコ会宮城町修道院生活寮

挨拶：三浦所太郎、久保田信(修道院長)

各地体験発表

第5回 1986年2月21・22日 21名出席

テーマ：明日の農村・有機農業ととりくむ

開催地：福島県耶麻郡山都町大字小舟字二ノ
坂山 いいで荘

挨拶：三浦所太郎、斎藤仁一(立農会)

発題：長峯久夫(立農会)「有機農業につ

56) 東北ミッションの活動の詳細は、通信『東北ミッション 農民宣教学校』に記録されている。同通信は三浦所太郎の編集により、第1号から第8号(1986年11月15日)まで発行され、87年6月に三浦が死去した後は、戸枝義明が編集・発行を引き継いだ。

57) 第3回については、『東北ミッション 農民宣教学校』第4号に記録されていると思われるが、同号を入手できず、詳細を確認できなかった。

いて(1)』
長谷川吉男 (立農会) 「有機農業について(2)』
戸枝義明 「聖書に学ぶ」
吉沢喜美男 「明日の農業について(A)」
吉田幾世 (向中野学園) 「明日の農業について(B)」

第6回 1986年7月13・14日 36名出席

テーマ: 農村における自立更生の模索と実践
開催地: 岩手県滝の上温泉 鳥越山荘
見学: ちくまヶ丘農場
挨拶: 三浦所太郎
講演: 吉沢喜美男 (『自立更生の模索と実践』)

第7回 1987年3月12・13日 [出席者数不明]

テーマ: 活きた農村・活きた農政
開催地: 岩手県胆沢郡金ヶ崎町 金ヶ崎酪農
研修センター・金ヶ崎保養センター
挨拶: 三浦所太郎
講演: 小関和一 (前農協四連会長) 「金ヶ崎の農業」
菅原喜重郎 (前衆議院議員) 「日本の農政」
加藤剛 (元岩手県会議員) 「私の歩んだ道」

東北ミッションによる農民宣教学校は、三浦所太郎の存命中に第7回まで開かれ、三浦の死後は、藤森守彦が会長に就いて、継続された。

(2) 学び合い

農民宣教学校は、「講師」による講演と、それに引き続き「ターグンク (tagung)」と名付けられた、出席者が幾つかのグループに分かれて自由に話し合い、その内容をグループごとにまとめて発表するという形で進められた。

第1回の終了後に三浦所太郎は、「次の集りには、相互に、研究していることとか、考えていることとか、現状とか、の発表に重点をおき

たいものである。何かの型にはめるのではなく、交わりをすることによって成長して行きたい⁵⁸⁾と語っている。第2回では、プログラムの中に「各地体験レポート」が加わり、藤森守彦 (岩手) 「出会いで変わった私」、郷野孝 (山形) 「酪農への希望」、斎藤仁一 (福島) 「農家の加工について」、佐々木純夫 (山形) 「百姓のつぶやき」の4つの体験発表が行われた。

第4回からは「テーマ」が設けられた。そして、この第4回のプログラムは「体験発表」だけで作られた。司会をつとめた戸枝義明は、「この集いはターグンク方式を用いる。……それは参加した人々全員が自分の考えを述べ、それを共同思考ということでもまとめあげ、みんなの共有財産としたいからである。一人の講師が何時間も自説を開陳するという旧式はとらない⁵⁹⁾と趣旨説明をしている。2日間にわたる体験発表及びそれに続けて行われるターグンクは、次のように構成された。

体験発表(1) 「農村と生活」

発表者 森 泰 (宮城県宮城町, 農業)
郷野孝 (山形県最上町, 酪農)

ターグンク (6グループに分かれて20分間の話し合い)

体験発表(2) 「農村と文化」

発表者 吉田幾世 (盛岡市, 向中野学園理事長)
安藤唯一 (岐阜県土岐市, 精神内科医)
平賀喜代美 (花巻市, 社会教育主事)

ターグンク (メンバーを替えてグループ編成)

体験発表(3) 「農村から日本と世界の文化を！」

発表者: 菅原雅典 (岩手県大東町, 農業)
今野喜代治 (山形県朝日村)

ターグンク (同上)

まとめ

58) 『東北ミッション』第1号, 4頁。

59) 『東北ミッション 農民宣教学校』第5号 (1985年12月10日), 2~3頁。

第4回の企画は、それまでの回に増して、出席者に大きな刺激を与えるものとなった。出席者の感想文のうちから幾つかを示そう。

吉池恵（山形県小国町，独立学園）。「信仰があって、この集りが開かれたことに心から感動し、感謝です。それも偉い肩書きをもつ人が語るのではない、ただの百姓をしているおじさんだったりすることがなんと素晴らしいことか。私が今まで学んだこと、考えたことすべてから「百姓」生活は理想であります。そして、そこに神がいてこそその意味は生きてくることを、今回、又、強く感じた。「神様は凡人がお好きにちがいない」（リンカーン）。この言葉は本当だし、本当だと信じて生きたい。牛飼いの郷野さんや今野さんのお話は、特に心に残り、これからの生き方に影響することと感じている。とにかく、深く神に感謝しつつ」⁶⁰⁾

マルチン・バウマン（盛岡市，四谷教会，カトリック神父）。「私は、皆さんの心からの話し合いに非常に感動し、また深く心を動かされました。これから、私は農業や食糧生産に従事するすべての人びとのために、もっとお祈りをすることにします。また、参加者の中に、第三世界の貧しい人びとの苦しさに非常に興味を持たれている人たちがおることを知り、大変慰められました。ありがとうございます。皆さんのなさることの上に、神の祝福がありますように」⁶¹⁾

岩淵一孝（岩手県大東町，森林組合職員）。「全くの驚きです。とんでもない集りに来てしまったというのが、私の実感です。自分の軽薄さに比べて、何んと皆様の言葉に重みがある事か。勉強が足りませんでした。あまりにも漫然と日々を過していました。目を見開かされました。次回には、もっと重みのある言葉が吐けるよう日々を見つめ直します。新鮮でした」⁶²⁾

小林好美子（東京，日本キリスト教海外医療協力会）。「半日の参加で、本当に残念でした。人生経験豊富な方々から、多くの学びを与えられました。自分の足許から固めて、それが世界平和に連なるよう祈りつつ、努力して行きたいと願っております」⁶³⁾

そして、次の言葉はすべての参加者に共通の思いであったであろう。

村上稔（岩手県大東町，無職）。「参加者の一人ひとり、生き生きと発言でき、考えることのできる集会でした。そこには、むずかしい理屈や他人への非難がましいことばなどありませんでした。お互いに共通な信頼と友愛を基調とした感謝が満ちあふれた楽しい、力強い集会であったと思います」⁶⁴⁾

ここに、三浦所太郎が生涯の最後に果たそうとした願いは、みごとに実現したのである。

(3) 最後の言葉

三浦所太郎は、通信『東北ミッション 農民宣教学校』の毎号に巻頭言を書いている。

- 第1号（1984年6月）「東北ミッションのめざすもの」
- 第2号（1984年8月）「東北ミッションの二つの業」
- 第3号⁶⁵⁾（1984年12月）「東北ミッションは気ばらずあせらずに」
- 第4号「東北ミッションと「脱」成熟への希望」
- 第5号（1985年12月）「東北ミッション「心」と「地下水」」
- 第6号（1986年3月）「東北ミッション 家庭とリーダー」
- 第7号（1986年9月）「東北ミッション 農村更生」

60) 同上誌，6頁。

61) 同上誌，6～7頁。

62) 同上誌，7頁。

63) 同上誌，7頁。

64) 同上誌，7頁。

65) 注57)を参照。

第7号掲載の巻頭言「東北ミッション 農村更生」は、86年7月に「農村における自立更生の模索と実践」をテーマに開かれた第6回農民宣教学校における学びを踏まえて書かれている。

第6回農民宣教学校では、上述の通り、吉沢喜美男が経営する「ちくまヶ丘農場」見学が行われた。そこは、岩手県雫石町の「盆花開拓地」と呼ばれる、やや傾斜のある土地に拓かれた広大な開拓地である⁶⁷⁾。1948年に満州から引き上げて来た長野県出身の農民31戸が入植し、途中で多くの人々が離農する中で、66年から酪農専門経営となった。86年現在、経営面積約74ヘクタール、農家4戸により、乳牛215頭、肥育牛338頭が飼育されている。農場見学の後、夕刻から吉沢喜美男の講演があった。

講演の中で、吉沢は、「自立の苦心と成功の背後にあるもの」として、二宮金次郎（尊徳）の説いた「経済と道徳融合」について熱心に語った。吉沢の話は、自立した酪農経営を成功させた背景に、二宮尊徳の経済哲学（＝「報徳」）への傾倒があることを語ったもので、参加者の大きな関心を集めた。

三浦所太郎は、第7号の巻頭言で、こう書いている。「今回、第六回農民宣教学校を開くにあたって『農村更生と精神更生、賀川豊彦著一九三五・一一・八』を再読してみました。序の第一行に「心田を耕さざれば田を耕すことが出来ない。とよくまあ二宮尊徳先生が言ってくれたものだ」と記しています。……国民の健康をまもり、精神を健全にする。人格的文化生活をする農業者の生活と農村をつくる。他者犠牲や自己主張でなく、自分の家庭と農業を通して充実して行くことです。ミッションの願いの一端として、農民宣教学校を開いていますが、教師も教科書もありません。今回は吉沢喜美男校長の下に同氏の農場を参観し、報徳の経済と道

徳、その実践を勉強しました。政治、経済、教育、宗教、芸術が一如になって生活されていました。農村更生は自分という一点から出発すべきことを覚知しました⁶⁷⁾。

そして、87年3月に岩手県の新潟酪農研修センターで開催された第7回農民宣教学校が、三浦所太郎の出席した最後の集りとなった。この時の三浦の開会あいさつはかなり長いものであった。その中で三浦はこう訴えた。

「この国の現状、世界の現状をしっかりと見つけ、資本の恐ろしい収奪から自らを解放し、人間の、人格の意志から社会づくり、家庭づくりをしていきたいのです。科学主義、経済合理主義に支配されるのではなく、人格主義をもってこの二〇世紀の非人間主義を克服し、弱者、ロボット化している労働者、生産者を救わなければならないのです。資本の意志は弱者を救いません。弱者のみが弱者を救うのです。農民が農民を救い、農村が農村を救うのです。弱者の自覚と協力こそ人間を人格にし得るのだと私は思います。

世界の大きな力を相手に弱者、すなわち農民が、農村が何が出来るかと怖じ気づきますが、政治・経済・文化・教育が中央だけにあるという錯覚から目醒めてほしい。中央だけに人材が集っているのではないのです。

我々が自覚して立ち上がれば、中央を凌駕する人材がなんぼでも地方にあるのです。経済と道徳を中心とした農協の徹底的活動－賀川先生は贖罪愛なくして協同組合なく、組合なくして農村更生の道なしと云いました－日本の協同組合運動は賀川先生のこの祈りを、理想を生かすことが出来ませんでした。しかし私は、この精神をもう一度学び、立ち上ることを日本の農協に希望してやみません。むしろ一緒にこれを遂行してゆく決心をしています⁶⁸⁾。

66) 同開拓地については、盆花開拓40周年記念誌刊行事業会編『拓土に咲く花－盆花開拓40周年記念誌』ちくまヶ丘農場、1988年に詳しい。

67) 『東北ミッション 農民宣教学校』第7号（1986年9月15日）、1頁。

68) 『東北ミッション 農民宣教学校』第10号（1988年1月30日）、2～3頁。

この第7回農民宣教学校でのあいさつが、三浦所太郎の最後の言葉となった。

4 おわりに

1987年3月12、13両日に開かれた第7回農民宣教学校へ出席して自宅へ戻った三浦所太郎は、4月中旬、盛岡の県立中央病院に入院中、意識不明となり、6月30日に死去した。74歳であった。

7月2日に前夜式が、翌3日に葬儀が行われた。葬儀委員長を菅原喜重郎が、主任司式者を戸枝義明牧師がつとめた。

『東北ミッション』第9号（1987年8月20日）は、「故三浦所太郎先生追悼号」となり、全18頁を使って葬儀のことと三浦の事業が詳報されている。

葬儀では東北ミッションを代表して松浦健一が弔辞を読んだ。松浦は、1953年につくられた大原酪農農場で三浦所太郎と出会って以来、三浦による山岳傾斜草地農業の実践を学び、金ヶ崎酪農研修センター設立に際しては中心的な役割を果たした人である。

松浦健一は、弔辞の中で、三浦所太郎が東山町畜産センター所長として山岳傾斜草地農業の指導に当たっていた時に心筋梗塞で倒れ、その後数年にわたり療養生活を余儀なくされたことを述べ、そして、こう追懐している。

「昭和四十九年雑木林の中に家を建てたのでとのお招きがあったので訪ねて見たら車も入れない林の中であって、山羊を飼い、バラいちごでジャムをつくり、山羊の乳といちごジャムでパンをごちそうになりながら土蔵を活用した書斎の中で宇宙論を教えて下さる先生は、すっかり元気になり生き生きした様子にすっかり魅せられて帰って来たことを、今でも忘れることは出来ません。

先生にはあの場所がすごく気に入り、その後何十回とお邪魔しましたが、書斎に入ると落ちていて信仰の重要性などを熱っぽく話して下さい

れ、農業経済こそ無限のサイクル産業であって、資源有限の工業は死の経済である。一時の工業経済の隆盛期はあっても、最後は農業しか残れないのだという自信と信念をもって農業にたずさわる者は頑張らなければならないと、何時も励まして頂いたことを今又思い起こしています〔後略〕⁶⁹⁾

三浦所太郎が、東北農業協会や東北ミッションの構想を熱っぽく語った自宅の書斎は、所太郎の死後、三浦恵子夫人により守られている。

*



写真4 三浦所太郎の書斎の建物



写真5 三浦所太郎の書斎の机上。東日本大地震により書籍が落下、散乱している

69) 『東北ミッション 農民宣教学校』第9号（1987年8月20日）、13頁。

その三浦の自宅が建つ起伏の大きな、森に囲まれた地面は、2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所の大規模事故により発散された放射能に汚染されてしまった。私は、その地面に立ち、「資源有限の工業は死の経済である」と語った三浦所太郎の言葉が今を生きる私たちに大きく迫ってくることを思った。

主な参考文献一覧 (著者50音順)

- 賀川豊彦『賀川豊彦全集』第12巻, キリスト新聞社, 1963年
- 賀川豊彦『賀川豊彦全集』第24巻, キリスト新聞社, 1964年
- 角谷晋次『みちのくの三愛運動-宮城県利府村・岩手県山形村のキリスト教成人教育』キリスト新聞社, 1993年
- 斎藤久吉・角谷晋次『東北農村と福音-宮城県利府村のキリスト教成人教育史』「聖農学園の歴史」刊行会, 1997年
- 菅原喜重郎編著『西洋哲学要史-西洋哲学史要・波多野宗教哲学(時間論)素描』東洋出版, 2016年
- 菅原忠夫『三愛塾の碑-ある口百姓の手記』あづま書房, 1992年
- 仙台東教会HP「風信子(ヒヤシンス)だより」掲載の「マックナイト物語」①~④, 2015年1月~4月 <http://www.kosodate-web.com/eastchurch/blog.php>
- 玉真之介「複合経営の理論と実践-佐藤正」大田原高昭・中嶋信編『協同組合運動のエトス-北の群像』北海道協同組合通信社, 2003年所収
- 東北学院資料室運営委員会「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会編『大正デモクラシーと東北学院-杉山元治郎と鈴木義男』東北学院, 2006年
- 農民福音学校・藤崎盛一編『農民福音学校-農民福音学校50周年記念誌』立農会, 1977年
- 平林広人『丁抹農村文化の真髓』文化書房, 1930年
- 藤崎盛一『農民教育五十年-乳と蜜の流るゝ郷を求めて』豊島農民福音学校出版部, 1976年
- ホルマン/那須皓訳『国民高等学校と農民文明』同志社, 1913年
- 盆花開拓40周年記念誌刊行事業会編『拓土に咲く花-盆花開拓40周年記念誌』ちくまケ丘農場, 1988年
- 松野尾裕「賀川豊彦の経済観と協同組合構想」『地域創成研究年報』第3号, 愛媛大学地域創成研究センター, 2008年
- 松野尾裕「二人の協同組合主義者 黒澤酉蔵と賀川豊彦-『乳と蜜の流るゝ郷』によせて」『日本経済思想史研究』第13号, 日本経済思想史学会, 2013年
- 松野尾裕「グルントヴィと北海道酪聯の開拓者たち-宇都宮仙太郎と出納陽一を中心にして」矢嶋道文編『互恵と国際交流』クロスカルチャー出版, 2014年
- 松野尾裕「御殿場農民福音学校と食肉加工品製造の実践」『愛媛経済論集』第34巻第2号, 愛媛大学経済学会, 2014年
- 松野尾裕「賀川豊彦と黒澤酉蔵-相互扶助の思想にもとづく教育と実業」『賀川豊彦学会論叢』第24号, 2016年
- 松野尾裕「岩手県摺沢の三愛塾運動」『雲の柱』第31号, 賀川豊彦記念松沢資料館, 2017年
- 三浦所太郎「千厩時代の波多野精一先生」『波多野精一全集第5巻月報』岩波書店, 1969年所収, 『三浦所太郎遺稿集』収録
- 三浦所太郎「おじいさん」『追憶の波多野精一先生』玉川大学出版部, 1970年所収, 『三浦所太郎遺稿集』収録
- 三浦所太郎遺稿集編集委員会編『三浦所太郎遺稿集 丘の家の囲炉裏から』三浦恵子, 1987年
- 向中野学園・吉田幾世『生徒たちに語った 私たちの学校の歴史』(改訂版)学校法人スコール盛岡スコール高等学校, 2012年
- 吉田幾世「出会いから四十年 夢を見つづけた人 三浦所太郎先生」『東北ミッション 農民宣教学校』第9号所収
- 『東北ミッション 農民宣教学校』第1号, 1984年6月15日
- 『東北ミッション 農民宣教学校』第2号, 1984年8月15日
- 『東北ミッション 農民宣教学校』第3号, 1984年12月15日
- 『東北ミッション 農民宣教学校』第5号, 1985年12月10日
- 『東北ミッション 農民宣教学校』第6号, 1986年3月15日
- 『東北ミッション 農民宣教学校』第7号, 1986年9月15日
- 『東北ミッション 農民宣教学校』第8号, 1986年11月15日

『東北ミッション 農民宣教学校』第9号, 1987年
8月20日

『東北ミッション 農民宣教学校』第10号, 1988年
1月30日

謝 辞

本研究にあたり, 2016年7月4日に, 三浦恵子様のご厚意により, 三浦所太郎の書斎において蔵書を拝見させて頂き, さらに貴重な資料を頂戴致しました。また, 本稿掲載の写真は上記の訪問時に許可を得て松野尾が撮影したものです。心よりお礼を申し上げます。三浦様宅への訪問の機会をつくって下さった一関市の佐藤時夫様(三浦所太郎遺稿集編集委員)並びに賀川豊彦記念松沢資料館の杉浦秀典副館長に厚くお礼を申し上げます。

付 記

本稿は, 日本学術振興会科研費助成事業(課題番号:16K03573, 研究課題名:日本における相互扶助の経済思想の現代史的意義に関する研究)による研究の成果としてまとめられたものである。